

渋中 創立六十周年
渋高 記念特集号



(渋川高校校舎)

昭和 54 年度
群馬県立渋川高等学校
創立六十周年記念事業実行委員会

特集号目次

実行委員長挨拶	1
学校長挨拶	2
PTA会長挨拶	3
今後に望む	4
前・元同窓会長	4
前・元PTA会長	5
学校近況報告	6
PTAだより	12
在校生だより	16
恩師より	17
卒業生だより	17
クラス会報告	19
同窓会支部報告	22
事務局より (PTA)	27
(同窓会)	29

御 挨 拶



大正九年に開校されました県立渋川中学校（現県立渋川高等学校）も、こゝに六十周年を迎えましたので、学校、PTA、同窓会の三者により記念事業実行委員を組織致しました。

校庭より望む赤城、榛名、子持の山々のたゞずまいは昔日のまゝですが、ゴロゴロと大きな軽石のころがっていた校庭も整備され、校舎も鉄筋四階建の近代建築に変貌致しました。半世紀以上多感な卒業生の青春を毎年かざってくれたそめいよしの桜も自分の責任を果たしたかの如く、いさゝか枯れがはげしくなつて来ましたので、六十周年事業の一つに加えて桜の若木を植樹致し、新たな半世紀の若人の思い出に備える事と致しましたが、感慨無しでは居られませんが、

我が齢と同じ桜の切られゆく

鉄筋の校舎に細し若桜

二代目の校庭桜花芽持つ

兆九

群馬県立渋川高等学校
六十周年記念事業実行委員会

委員長 佐 藤 直（同窓会会長）

（旧十回）

六十年の星霜は一万二千の卒業生を世に送りました。この動勢を出来るだけ確実に把握致します事も郷土に残る我々の努めと存じ、記念事業の一つとして、同窓職員を中心に一年間の時間をかけて、既刊の同窓会員名簿のより一層の訂正補強に努め、ようやく新名簿を完成する事が出来ました。同窓会員並びに御家族の方々の直接、間接の御援助に深く感謝致しますと共に同窓職員の献身的な御奉仕に心から厚く御礼申し上げる次第です。間もなく同窓各位の御手許まで御届け出来る事と存じます。行間よりなつかしき先生方や、先輩の顔、同窓生の思い出、後輩の思い出等々をお読み出し頂ければ幸いです。

尚、当小冊子は母校を中心とした最近の動勢を皆様に御知らせ致すべくPTA新聞、同窓会報の合体による特集号で、さゝやかな記念事業の一環として地元PTA関係有志並びに同窓生有志、学校、よりの寄稿を頂いて編集致しました。しばしなつかしき母校を回想して頂ければ幸いです。

最後にPTA各位、並びに同窓諸君の平素の物心両面の暖かき御援助に深々の謝意を表し御挨拶と致します。

御 挨拶



本校も大正九年創立以来、はや六十年を迎えました。五十周年の場合は、記念事業の一つとして洪高五十年史が刊行されましたが、これは克明詳細な資料に基づいて五十年の歩みを回顧し、旧制洪中および洪高TAの方々にお願いして、身をもって体験された学校生活や洪高教育をつづっていただき、人間の確かな眼を通して六十年の歴史をとどめようと企画されたものと理解しております。まことにすぐれた企画と申せましょう。人間味溢れた六十周年記念誌ができあがることを心から期待し待望する次第であります。

私が洪高に赴任して以来三年が経過いたしました。この短い三年の年月の間にもいろいろと変化がありました。洪高教育の基本方針は踏襲してきましたが、各年度の努力目標は洪高教育に欠けている点を強調し、よりすぐれた教育効果を生み出すよう、洪高教育がより次元の高い教育として存在し得るよう教職員が協力して努力いたしました。変化はこのような内部努力に負うところもありますが、これを可能にした恵まれた外的条件を見逃すことはできません。この三年間は社会情勢も比較的落着いた時期でした。学校生活を根底から揺り動かすような社会的変動も無く、落着いた状況のもとでよ

群馬県立渋川高等学校長 水 穴 再 喜

りよい洪高教育の創造が可能であったことはまことに喜ばしいことであります。社会全体が激しく揺れ動くとき、学園が弧高を保ち得ないことは歴史の証明するところであります。

本校六十年の歴史を回顧するとき、それは平和と動乱のないまじった歴史であります。大正デモクラシーにかげりが射し、世界的恐慌から戦乱の時代へ、やがて終戦、平和主義を標ぼうする民主国家の成立をみたとは言え廃墟の中からの出発、手さぐりの学制改革、打ち続く社会不安、徐々に回復して行く社会的動揺、時に火を噴きながらも甦える平和、これらの時代を通して旧制洪中・洪高は時代の波にもまれながらりっぱに生き抜いてきました。そしてその中で樹立されたのが質実剛健・堅忍持久の校風であります。かざり気が無くまじめで強くたくましく、苦しいこともじつとがまんして耐え抜く精神力、これが旧制洪中・洪高のバックボーンであり、未来に継承発展さすべきものと考えます。特に現代のように平和に馴れ柔弱華美の風潮が世を覆っている時、この校風の中で青年の育成が図られることはまことに意義あることと申せましょう。

現在に立って過去をふりかえり、さらに洪高教育の未来を展望するため、この生きた六十周年記念誌は大きな役割を果たすと共に同窓やPTAの方々の心の絆をよりいっそう固く結びつけることを信じ、発刊を祝ってごあいさついたします。

御 挨拶

群馬県立渋川高等学校PTA会長 大塚 修 平



母校の創立六十周年記念にさいしまして、一言お祝いの言葉を申し上げます。

一口に六十年と申ししましても大変長く、人生で云えば所謂還暦と云うことになりま
す。特にこの六十年は日本にとつても、大
変な激動期であり、その間、学校を守り育て、こられた歴代の校長
先生はじめ教職員の先生方、諸先輩の御苦労はなみなみならぬもの
があったこと、推察し感謝申し上げます。

私も一昨年名譽ある母校のPTA会長にえられ、それと同時に
母行へ行く機会も多くなり、近年の同窓会の諸先輩の活躍等をお聞
きし、後輩に対してお心使いの大きさに今更ながら驚いている次第
です。すでに多くの方々は御存知と思いますが、五十周年記念のさ
いの記念事業として建設されました同窓会館は当時一部生徒により
引起された学園騒動を痛く心配された先輩が先生と生徒とが合宿し
て心の交流をはかりながらより充実した学校生活を送るようにとの
配慮から建設されたものとお聞きして、現在生徒をもつ親として御
礼の申し上げようもございません。その効果はすぐにあらわれ県下で
も有数な進学校として自他共に認め、母校の名声を高められたこと
は如何に先輩各位に先見の明があったか、又常に後輩のこと、母校
のことを考えておられたかの証明であります。このように立派な先
生方、同窓諸先輩のおかげで現在生徒は大変めぐまれた学校生活を

送っていますが、やはり問題が皆無と云うわけではありません。新

聞等で報道されます交通事故をはじめとするいろいろな事故、事件
等本校では顕在化はしていませんが、その芽は内在していると考え
た方がよいと思います。各家庭で高校生になると子供をどう取扱か
つたらよいか、いささかもてあましていると云うことをよく聞きま
す。その為の一助として学校と家庭との今迄より以上の情報交換を
行いたいと考えています。その上で生徒の実体を把握していたゞき
健全育成をする。これを今年度のPTA活動の柱にしたいと思つて
います。又意義ある母校創立六十周年を記念してPTAとしての事
業を報告させていたゞきます。その一つは近年校舎の増改築のため
校内放送設備が老朽化と共に使用にたえなくなり大変教育効果が悪
くなっていますので校内放送設備一式を寄贈致します。

次に同窓生の方々はよく御存知のことですが母校の運動場は軽石
ばかりで大変泣かされた思い出を皆さんおもちと思います。その運
動場も昨年全面改修されましたので、その後の保守のために自動転
圧機を購入し、これもあわせて寄贈致します。この事業につきまし
て先輩PTA諸兄の御尽力によります財産をもつて購入し寄贈しま
すので是非御了承をたまわりますよう紙面をおかりしてお願い申上
げます。

大変まとまらないことを申し上げましたが同窓諸先輩の母校、後輩
に対する御尽力を感謝し、PTA会員各位の今後の御協力をお願い
申し上げます。御挨拶にかえさせていたゞきます。

五十周年から六十周年・今後へ

前同窓会長
群馬県議会議長

真下 玄 永 (旧九回)

創立五十周年事業を同窓会長として皆さんの御協力のもとに同窓会館の建設、サブグラウンドの開設や五十年史、名簿の作成等、特に当時在校の先生方の御努力に依り夫々完成出来たのも最近の様に感ぜられるのに早十年の歳月を閲したとは夢の様で、人生も亦僅花一朝の夢の如く思われます。

吾妻川に開設したサブグラウンドは距離の関係か利用度が少く、草の生い茂れるままに荒れ果て、いたが、子持村で整備するから共用させてくれと申し入れがありました。

会館の利用は在校生が先輩が良いものを残してくれたと大変効果的でした。

今回は北側の特殊教室を建替える計画もでき、これから実施設計に着手します。

これで丁度施設整備としては形が整うと思います。

六十歳になると人間なら老年期で円熟した人間性が生ずるころです。洪高も校風、伝統も県下の名門校として誇示出来る様になりました。

私は中卒からの進学は英国の様に適性教育に重点をおいて現在の様に誰でも普通高校から大学へと進学するのではなく、職業教育に重点をおき、実業高校でみっちり腕を磨かせる必要があります、また高等職業訓練校等を格上げして価値ある学校にして、その卒業生が社会の中で充分に活躍出来る基礎を作る必要があると考えます。

駅弁大学と云われる様な大学は数を減らして四年制位の職業高校を作って教育の転換を図る必要があると存じます。

話が余談になりましたが、佐藤会長が熱心に同窓会をまとめてくれて居りますので、同窓生の皆さん、各地の同窓会支部や職域支部の積極的な活動を支援して連絡を密にして親睦を図って下さい。私事ですが、五期県議として当選させて戴きました事を心より御礼申し上げ、今後も同窓生の一員として恥じない仕事をしてゆきたいと考えております。

若い世代にのぞむこと

前同窓会長 北村 英 吾 (旧五回)

新年度の洪高合格者名を上毛新聞で読む中に、その上欄に校訓として「質実剛健」という標語を見出し出て感慨に耽った。この校訓は旧制渋川中学の初代校長杉原先生によつて定められたものと承知して居るが、思えば遠い六十年の昔に生れたものだった。当時は創立当初で校舎も木造二階建の陋屋で、校庭は軽石で荒れ放題、その中で生徒達は寒冷暑熱を通して粗衣粗食、裸足で校庭を駆け廻る毎日が続き、文字通り「質実剛健」を全人格で実践していたといえよう。然しそれ故に精神的、肉体的に自己を鍛練するスパルタ的教育に終始した時代であった。

翻って現在は世相が一変し、物質文明の高度の発展で、エレクトロニクスは総ゆる生活分野に普及し、消費は美德とされ、レジャーは年を追って多様化し、いつしか個人の自主性は薄れて人間喪失の危機さえ叫ばれるこの頃となった。

尤もその潮流も数年前よりの省エネルギー政策の為に止むなく生活水準を切下げて、物資の欠乏に耐える戒めが大きく求められて来て、六十年前に生れたこの教訓が再び価値観を取戻して来たかと所謂「歴史は繰返す」という世の宿命を感慨を以て噛みしめるこの頃である。

そして消費を美德とするレジャーに疲れた青少年の精神と肉体にとって、この古い「質実剛健」の校訓こそ、新しい人生行路の最も時宜に適した尊い指標であると、古い先輩の私は、若い世代にその実践を心から望む次第である。

次代をつくる人に

前PTA会長 川 崎 富 三(旧二十回)

洪川高校創立六十周年記念事業の一環として特集号が発刊されることになりましたことに對し実行委員会の皆様の御苦勞に感謝と御礼を申し上げます。顧りみれば、創立五十年記念行事が行われ五十年史が刊行されたことが、つい先頃のことであつたと思えるのに、たちまち六十年をむかえてしまった。この十年間の大半PTA、後援会、同窓会の役員として過ごしてきたことを喜んでおります。高度成長経済時代から安定成長経済時代へと激動の十年間であり、教育環境にも変化の多い時であつたと思われませんが、洪高にとっては梶原、水穴両校長の指導と関係者の御努力によつて恵まれた十年間でありました。今日、洪高の実力は県下高校群の中にあつてベスト5にランクされるにいたり、他校から羨望の的となり、入学希望者にとつてはあこがれの門となつたのである。

高校進学は九三%、大学進学率五七%といわれる今日、当校生は九五%が大学進学を実現するに到つており、まことに目ざましい発展充実と喜んでおります。本年から統一テストが実施されるようになったが、生徒の進学希望は更にたかまつており、この傾向は高校としては当然のことと思われるが、社会全般から見ると、その内容は流動的な要素をもつており、この際生徒も保護者も社会状況に對応し得る體質を備えて欲しいものと考えます。水穴校長が卒業式の訓辞の中で

「卒業生諸君は二十一世紀をせおう人間となれ」

言われるように、次代をつくる人になるべく努力し、学ぶ生徒の教育の場としての洪高として今後ますます発展することを希望して止まない次第であります。

高校生と両親に望む

元PTA会長 川 島 尚(旧一九回)

子供が義務教育から、高校に進学して、『何故、洪川高校に進学したか、高校で何を学び、どんな生活を送り、卒業後どんな進路を進みたいか、将来の希望は?』と云う問に答えられるのは何人いるだろうか。ただ漫然と洪高に入れる成績であつたから入学し、将来は、合格出来そうな大学に入れて、親のもとに歸つて就職してくればという安易な考え方を持っているのが大部分ではなからうか。将来のことなど話そうにも子供は、親と話し合いをしないという家庭が多いのではなからうか。高校生の三無主義の「無氣力」という一因に両親の無関心というのが加わっているのではないかと自省し

たいものである。

高校に入學して、陸上部に音楽部にと部活動をしつかりとやることも高校生活の充実には是非不可欠の事であろうし、進学の為に、全力を投入するのも良いであろう。しかし、高校は、最後の普通教育の場であるから、自分の不得意な方面にも力を注いでもらいたいと思っている。例えば、一年クラブ活動に全力を文科を志す人も数学クラブに顔を出すとか、理科を志願する人も哲学書を読んで見る等の生活で、高校生活を充実出来ないものだろうか。

将来の進路を決める上にも一言申し上げたい。例を身近に求めて申訳けないが、最近将来教師になることを志す人が増加している様である。しかし、他人に教えるという事と学問の知識が深いという事は別のことである。学校の成績が良くとも教える技のまったく下手な人もいる。又教師たるものは、その高潔な人格を要求されるものである。例えば、私の様に若い女の子を見れば、手を握りたくなり、腰をなぜたくなる様な人間は教師に向かない。父と母との性格、そして子供の性質を考えて固い教師に適するか、自由な天地に飛躍し羽搏ける人か、親と子がじっくりと話し合ってもらいたいものである。

高校生の親としては、子供の特性を見きわめて、将来の示針を話し合える親と子の対話位は持たたいものである。学校まかせの教育でなく、PTAにも進んで参加して、現在の教育のあり方を両親も肌で感じてもらいたいものである。

大学の入試も小論文や口頭試問が多くなっている。その採点方法をきくに、文章力を見るのではなく、その人格や考え方を見るのが主力の様である。高校生活を立派な人間形成の場として頂きたいも

のである。

◆学校近況報告◆

共通一次元年の進路状況

学習進路部 丑 丸 幾 三

すでにご存じのことと思いますが、今年度から国・公立大学入試に共通一次試験が実施されたことによって、入試状況は大きく変わりました。

まず、共通一次試験について簡単に触れてみます。従来、過熱した受験戦争が生徒に大きな負担を強い、引いては高校の本来の教育課程を破壊してしまつたという、高校側の意見、要望に応える形で、この制度は始まつたとされています。したがって、共通一次では高校教育での、基礎的、かつ一般的な内容を純客観的な方法（マーク・シート方式）でテストすることになっています。初年度の結果は全国平均で六三二点と予想よりも高く（抽出による試行テストは五五五点）、問題内容も、平素の授業をしつかり身につけていれば、恐るるに足りず、という印象を高校側に与えました。

しかし、大学側の定員が増えず、競争原理がなくなる以上「共通一次はむずかしい」という安心感にあぐらをかいているわけにはいきません。それなりに高い得点をあげなければならず（例えば群馬大の教育学部は七百点代）、ほんとに身についた基礎的な力が要求されます。

表1 昭和53年度進路状況報告
卒業生 355名

I 就職状況

1. 就職希望者	21名		
2. " 決定者	20名		
内わけ			
国家公務員	5	地方公務員	6
国鉄職員	1	公社職員	2
自衛隊	1	民間企業	4
自営	1		

II 進学状況

- 進学希望者
現役 334名 (94%)
旧卒 約290名
- 合格者実数
現役 116名 (34.7%)
旧卒 202名 (約70%)
- 合格延数 ()内は昨年度

	現 役	旧 卒	計
国立大	33 (48)	55 (45)	88 (93)
公立大	5 (5)	13 (8)	18 (13)
私立大	77 (92)	341 (298)	418 (390)
短期大	5 (2)	6 (2)	11 (4)
各種学校	21 (15)	7 (5)	28 (20)
合 計	141 (162)	422 (358)	563 (520)

群馬大学部別

医学部	(1)	3 (1)	3 (2)
教育学部	11 (13)	9 (10)	20 (23)
工学部	7 (11)	6 (9)	13 (20)

国立大学

大 学 名	現 役	旧 卒	計
北海道教育大		2	2
帯広畜産大		1	1
弘前大		1	1
岩手大		3 (2)	3 (2)
東北大	2	2 (1)	4 (1)
山形大		1 (1)	1 (1)
茨城大	1 (1)	2	3 (1)
筑波大	(2)	2	2 (2)
宇都宮大	2 (1)	1 (3)	3 (4)
群馬大	18 (25)	18 (20)	36 (45)
千葉大	1 (0)	3 (2)	4 (2)
埼玉大	2 (2)	2 (1)	4 (3)
電気通信大	2 (1)		2 (1)
東京大	(1)	1	1 (1)
東京学芸大	1 (1)	1	2 (1)
東京農工大		2	2
東京工業大		2	2
東京芸術大		1	1
一橋大		2 (1)	2 (1)
横浜国立大	1 (1)	(1)	1 (2)
新潟大	(10)	3 (6)	3 (16)
岐阜大		1	1
静岡大		1	1
京都教育大		1	1
徳島大		1	1
佐賀医科大	1		1
琉球大		1	1
東京外国語大	1	(1)	1 (1)
神戸商船大	1		1
合 計	33 (48)	55 (45)	88 (93)

公立大学

大 学 名	現 役	旧 卒	計
高崎経済大	5 (4)	11 (2)	16 (6)
東京都立大		1 (2)	1 (2)
都留文科大		1 (2)	1 (2)

私立大学 (合格数上位校)

日 本 大	7 (17)	53 (39)	60 (56)
法 政 大	4 (6)	22 (22)	26 (28)
中 央 大	3 (7)	21 (17)	24 (24)
東 洋 大	4 (3)	20 (17)	24 (20)
神 奈 川 大	4 (5)	16 (15)	20 (20)
明 治 大	2 (1)	17 (15)	19 (20)
慶 応 大	9 (2)	8 (3)	17 (5)
大東文化大	4	11 (11)	15 (11)
専 修 大	2 (4)	12 (14)	14 (18)
早 稲 田 大	3 (6)	11 (11)	14 (17)
工 学 院 大		12 (4)	12 (4)
駒 沢 大	2 (4)	10 (17)	12 (21)
東 海 大	(4)	11 (11)	11 (15)
明治学院大	5 (3)	5 (6)	10 (9)

以下略

表2 進学実数

分母は現役 () は昨年度

国立大学	87 / 33 (85 / 44)
公立大学	9 / 2 (6 / 2)
私立大学	188 / 55 (194 / 65)
短 大	9 / 4 (3 / 1)
各種学校(現役のみ)	22 (9)
計	315 / 116 (297 / 121)

さて本校の生徒の状況ですが、こゝ数年来約九五%が進学を希望し、そのうち、国・公立大学を希望する者は七〇%を上まわっています。今年卒業した生徒も二五二名が共通一次を出願（うち六名は受験せず）しましたが、結果は表1のように、現役にはなかなか厳しい結果となりました。

それに対し、旧卒（浪人）の諸君は健闘し、なかなかの好成績をあげました。現・浪合わせた合格数は県内で第四位と、まずまずの成績といえましょう。

大学別についてみると、従来のように一期校、二期校の別がなく、国・公立の受験のチャンスが一回になった（高崎経済大など一部の公立大学では試験日をずらせているので併願できる）ため、すでに予想されていたように地元志向が強まり、特に現役では群馬大に集中しました。これは県内各高校とも同じで、群馬大は競争率、合格水準とも大幅にアップし、特に教育学部は全国的にも激しい競争率となりました。（平均競争率は五・七倍）。

これは余談となりますが、このように地元志向の強まる傾向の中で、法律、経済などを専攻できる学部を群馬大に併設してもらいたいという要望は次第に大きくなるでしょう。

現役に対して浪人の諸君は全国の二十四大学にまたがって合格し、これが好成績をあげた原因ともなっています。

東大、京都大には昨年はそれぞれ一名の現役合格を出しましたが、今年は東大に浪人一名にとどまりました。

次に私立大学についてみますと、進学率の全国的な上昇に伴って、ここ数年間、中堅校を中心に軒並みに競争率、レヴェルともにアップしてきましたが、国・公立の一本化による併願の増大は、この傾

向にいつその拍車をかけました。

このことは私立大への現役生徒の合格を困難にし、浪人の進出を更に推し進めました。特に、共通一次が五教科七科目と科目数による負担が大きいため、学力のやゝ不足している諸君は併願しても共倒れという結果に終わっています。

大学別にみると、延数では日本大が現・浪合わせて六十と昨年に続きトップ。これは全国的にもかなり高い数です。その他、慶応大に九人、明治学院大に五人の現役合格が目立ちます。

その他、技術系短大、各種学校への進学がこの二・三年の目立つた傾向で、現実的な進路選択の表れといえましょう。

進学者の実数は表2の通りですが、現役で進学の決定した者は一六名と、ほぼ昨年並みとなりました。

さて、今後の問題ですが、最終的には一・二年時の基礎学力が合否を決定するわけですから、学校でも全力をあげて生徒の学力向上に努めますが、ご家庭でも、ご子息の学習にご協力を戴きたいと思っています。それと同時に進路の選択を早期に決定し、（二年の後半がメド）しっかりした目的をもって勉強することが勝利を決定するポイントです。

最後になりましたが、就職希望者は全員職を得て、元気に頑張っています。

最近の運動部活動および体育の状況

体育科 山下 隆二

現在洪高の生徒数は、およそ千百余名であるが、このうち運動部

に所属している生徒は約三百名である。部の数は十五部で陸上、バレー、バスケット・サッカー・軟式庭球・レスリング・卓球・柔道・剣道・空手道・体操・山岳・スキー・スケート・野球があり、それぞれ活躍している。特に最近の渋川高校の体育活動は目ざましいものがある。以下最近四年間の状況を簡単にまとめてみたいと思う。

昭和五十年度 この年関東大会へ出場したのは陸上十二名、レスリング十名、空手十一名、軟庭二名、スキー四名の計三十九名であった。さらに全国大会に出場したのは、空手道十名、山岳部四名、軟庭二名、スケート四名、スキー一名の計二十一名であった。この中で特筆すべきは空手道部の活躍で、団体型の部で全国優勝し、個人でも型の部で若井彰が優勝という偉業を成し遂げたことである。

昭和五十一年度 この年の運動部の活躍も近年にないすばらしい成績であった。全国優勝が三種目で四つあったという事である。一校の中でこれほど優秀者を出した学校は群馬県ではないと言われた。これはこの年度県体協三賞の受賞者が一般を含めて百三十三名いたわけであるが、本校受賞者は十一名いたことからもうなづけることである。活動のあとをみると、陸上では、一年生の品田浩が国体に出場し少年Bの部走り幅跳びにおいて七メートル一〇を跳んで優勝、二百メートルにおいても四位に入



賞した。空手道では、全国高校選手権大会において、若井彰が個人型の部で優勝し、この種目二年連続全国優勝の偉業を成し遂げ、さらに団体型の部で若井彰、木暮哲雄、笠井伸彦、津久井宏人、久本武士、後藤光徳のチームは優勝し、これまた全国二年連続優勝のはなれ業をやったのけ、全国に渋川高校の名を轟かせたのであった。スケートでは、国体において少年二千メートルリレーに群馬チームの一員として出場した深井靖士、大塚隆平が孺恋高の二名と組んで堂々の優勝を飾った。

また、スケートは五十二年一月伊香保において全国高校総体スケート競技会（スピード）が開かれ渋川高校からは七名の選手が参加した。そして深井靖士が五百メートルに二位、千五百メートルに四位、大塚隆平が千五百メートルに二位、関聡が五千メートルに八位にそれぞれ入賞した。これにより、総合で全国第三位という立派な成績を残した。この大会では、群馬の孺恋高校が史上初の男女総合優勝で新聞紙上を大いににぎわしたので渋高の影がうすれたが、この三位も実に堂々としたもので大いに称えられるものである。

この年度はこの他にもスキーで全国大会へ一名が出場し、全国大会出場者は十七名であった。また、関東大会には陸上十七名、レスリング十四名、空手九名、山岳六名、スキー二名の計四十八名の多くが出場し、優秀な成績をおさめている。

昭和五十二年度 この年より毎年五月に行なわれている群馬県高等学校総合体育大会いわゆる県総体が国体並みに種目ごとに成績をポイントで出し学校対抗による総合順位を争うようになった。渋高は、野球を除く十四種目に参加した結果、男子五十一校中第四位という輝やかな成績をとったのである。一位は、高商、二位は前商、三

位は高崎高であった。この大会で活躍した部を挙げてみると、陸上部総合二位、空手道部団体二位、山岳部団体二位、柔道部団体三位、レスリング部団体三位、剣道部団体七位、バレー部ベスト八、サッカー部ベスト八、という成績であり、高校体育連盟より学校表彰を受けた。

そして関東大会へは陸上十八名、レスリング九名、空手道九名、柔道八名、計四十四名の多人数出場し、それぞれ健闘した。

全国大会には陸上十二名、空手道七名、山岳四名、レスリング二名、スケート四名の合計二十九名の多くが参加した。その中で主な成績は、陸上で品田浩が百メートル四位に入賞し、空手道の団体型の部は堂々二位となったが惜しくも全国大会三年連続優勝の夢はたれた。尚個人型の部で津久井宏人が五位に入賞した。スケートでは深井靖士の活躍が特に目立った。深井は、国体においても五百メートル二位、千五百メートル四位の成績を残したが、全国高校総体スケート選手権において遂に五百メートルに優勝を成し遂げたのである。

昭和五十三年度 前年度、前々年度が良かっただけにそれほど成果はなかった年と言える。活動の成果をあげてみると……

五月に行なわれた県高校総体は、男子五十二校中第十四位であった。主な成績は、空手道団体二位、山岳団体二位、レスリング団体三位、陸上総合五位、柔道団体八位、バスケットベスト八、体操団体八位等であった。

六月の関東大会には、陸上十名、空手九名、レスリング十二名、柔道三名の計三十三名が出場したが、空手の団体型の部二位、個人型の部で山崎基実の二位が光った。

全国大会へは、陸上六名、空手九名、山岳四名の計十九人が出場した。陸上では百と走り幅跳びの二種目優勝の呼び声が高かった品田浩は百メートル決勝走行中に脚の肉離れをおこして涙をのんだ。また千六百メートルリレーも準決勝では好記録を出しながら入賞をのがした。空手では団体型の部で二位、個人型の部で山崎基実が四位に入賞し、全国学校別総合順位六位となった。

冬期においては、スキーで牧毅が関東大会と全国大会に出場した。スケートは全国大会に六名が出場したが、決勝進出はなかった。また国体に二名出場したが、遠藤庄宏が一年生ながら少年の部五百メートルに堂々三位に入賞したのは立派であった。

以上がここ四年間の運動部関係のあらましであるが、この他の体育活動をいくつか紹介しておくことにする。

開校記念マラソンは、現在も毎年実施しており、五十四年度も四月二十日小雨の中で第六十回開校記念マラソンは実施された。交通事情のためコースはあちこち変ったが、年中行事の一つとして実施されている。現在のコースは、洪高より北へ洪川原町線を通り金井発電所をまわり水路わきを学校まで帰る全長八・五キロのコースである。

また、昭和二十九年より実施されているものに沼高定期戦がある。これは体育を中心として全校生徒が何らかの種目に参加して得点を競うもので運動部対抗と一般生徒・職員の対抗となっている。一般生徒の対抗の日は洪高の半分が沼高へ移動し、沼高の生徒の半分が洪高へ移動して球技等に闘志をぶつけ合うこの行事は生徒の意気を大いに挙げるものとなっている。現在までの対戦成績は洪高の三勝二敗である。

ともあれ現在の渋高は、文武両道に意気を高くしている感が見られる。体育後援会等の組織的な援助も運動部活動や体育行事の大きな支えになっている事も忘れるわけにはいかない。渋高の今後益々の発展を祈念する次第である。

●記念会館●

会館部 熊沢 章

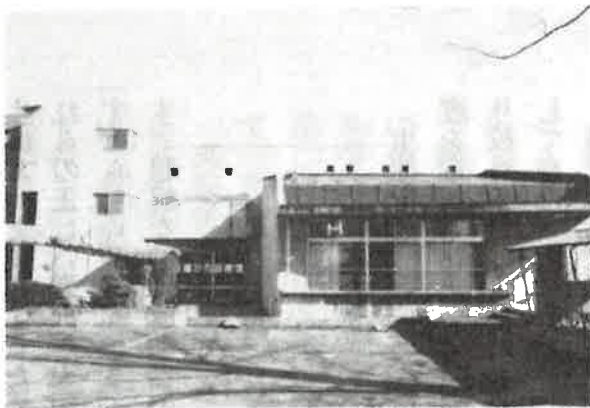
御来校の方が正門を入ると、本校舎の裏側東北隅に煉瓦色の屋根、コンクリート造りのユニークな建物が眼に入ります。これが

本校五十周年記念事業の一つとしてPTA、同窓会の方々の多大の御協力により建築された記念会館です。一階は会館事務室・管理人室・ホール・食堂・厨房・ボイラー室・浴室・洗濯室・便所、二階はベツト（四十八名分）・職員当直室・洗面所、三階に同窓会室があります。

記念施設規定の第二条（目的）に「本施設は本校教育の推進と向上のために、教育課程に定められた教育

53年度 記念会館利用状況

	生徒会等 クラブ	ホーム ルーム	計
合宿件数	55	14	69
宿泊日数	127	14	141
宿泊人数	750	600	1,350



(会館全景)

活動、その他の教育活動、PTA同窓会の研修・親睦を目的とする集会、その他に使用する」とあり、ホームルーム合宿、生徒会クラブや委員会の合宿、各種集会等で使用されております。特に夏休みはほとんど隙間なく、同時に三クラブが合宿に利用することもある等、活潑な利用により大きな成果をあげつつあります。

五十三年度一年間の利用状況は表の通りです（数字は延数）



(ホールでのミーティング)

県下高校では数少ないこの記念会館を末長く大切に使用していきたいと願うものです。

三年生の生徒・保護者学校に望むもの

三年部会長 小林方紀

矢野健太郎先生は、アインシュタインの来日の折に、父に言われたことを次のように述懐しています。

「相対性理論がたとえどんなに難しい理論であっても、要するにそれはアインシュタインという一人の人間の考え出したものだろう。したがって、お前だってよく勉強したら、きっとアインシュタインの考え出した相対性理論がわかるようになるよ。」と。

アインシュタインの来日が、数学者矢野健太郎誕生へのきっかけとなったのです。だが、アインシュタインの来日ということは、偶然であり、氏にとって、重大な事件ではなかったのです。こゝに引用した父親のことばがなかったとしたら、果して数学者矢野健太郎は存在したでしょうか。

実は、私たちのまわりにはこれらの刺激因子でいっぱいなのですが、私たちはそれを日頃見落しがちなだけなのです。その刺激因子はある時は、親から、また先生から与えられる点で私たち親も責任の一端を任っているのですが、何といてもその刺激因子の開拓者は君たち自身なのです。ここで刺激因子は待っているだけではやってこないこと。学習、体験を通して獲得するものであることを忘れないでください。

高校時代。それは刺激因子——きっかけの宝庫です。君たちが人

生において成功するためのきっかけがうよく／＼しているのです。それらの正しい選択が大切なことは言うまでもありませんが、まず、すばらしい将来へのきっかけを求めて積極的に模索してほしいのです。臆病な心は成功へのブレーキです。

高校生活の仕上げを

三年学年主任 古仙隆夫

生徒総員三六一名、職員一六名ともに最終学年である昭和五四年を迎え、新しい気持ちと有効な緊張感をもって学校生活はもとより校外や家庭生活においても、学業、生活両面における向上を目指して当たっている。

高校生活三年間の総仕上げと、進路決定という難関を突破するという大きな問題をどう乗り越え、解決して生徒自身の成長に役立てるかという課題にとり組んでいる。

このために、生徒・職員の交流の深まりと協力をおして規律ある学校生活を推進してよい生活のリズムとパターンをつくり、生徒各自の持つエネルギーを有効に発揮させ、依存や甘えを去って、自我の成長・確立のための話し合いや、自らの努力によって達成させる援助も行っていきたい。

この基礎の上に学力の向上のための日常の授業の充実、家庭学習への援助、保護者面接による家庭指導の強化への協力依頼、年間計画にもとづく一五回に及ぶ各種模擬試験の実施、学習や、大学等受験に関する多くの資料の提供や解説、教育相談をとおしての個人の問題解決による学業への志向と集中への援助等、あらゆる生徒と教

師の触れ合い（暖かさと厳しさ）をとおして進歩と充実をはかっていきたい。

そして、最終的には、生徒の自己理解と自己像の把握、将来への展望と自己実現のための進路選択・決定という一連のガイダンスの実施をとおして、高校生活三か年の仕上げをなし、特に現役合格率の向上をはかるべく努力したい。

そして、これらを実現する基礎は、本校の伝統である「質実剛健、堅忍持久」の精神力であることを信じ、目的達成に邁進したい。

二年生の諸君へ

二年部会長 宮 沢 要

PTA役員として改った口調で高校生に関し語る資格は余りありそうにないが、実社会に出てからの経験に鑑みて高校生に適切な助言を与えるには余りにも心細い。現在多少でも感想めいた事を語る資格があるとするならば、それは私自身一人の人間として考えを述べ、諸君の参考に資する以外にないと思う。生徒の皆さんは現在高校教育の最も高度な教育を受けつゝあるか、或はそれを志しつつあるうし、何んと云つても知識階級に仲間入りした人間であるに相違なく、その点において先づしっかりした自覚を持つ事が必要であろう。又、人が生活を営んで行く上に意識するとならないに抱らず日常生活の全般に互つて高度な知識の力が要求される今日の時代に於いては出来得るかぎり多くの教養を身につけておかねばなるまいか、それには伸る事の早い高校時代に種を蒔いてその基礎を作っておく事は非常によいと思うし真実で確かな知識は如何に多くても多

過る事はないと思われる。

従つて高校の課目は何れも知識人の基礎的な訓練としては是非必要でありしつかりやって置く方が得策でありそれを中心に大いに参考文献を繙き研究的に学習活動を営む事が理想と思う。高校生活は長い人生の一課程であります、二年生ともなれば将来携る職業への進路の選定をしなければならぬ大事な時である以上早期に将来の目標に向つて計画を立て、気持をひきしめて悔のない学習生活をしたいものです。とにかく青春時代に何か一生懸命やらなくてはならないのだから一杯体を動かし強い根性を養いつまり全力をあげて自分自身に挑戦し、洪高に青春の情熱を真の意味で傾けられる学校にしたいものです。

最少律・最少養分律

二年学年主任 北 爪 恭 平

第二学年をしつかり過した者は、たとい浪人したにしても、大学に合格できるが、油断したり怠けてしまった者は浪人しても合格できない——という意見がある。短い表現であるから、勿論全面的に正しいとは言えないが、高校生活の一面を的確に表現したものととして、充分嚼みしめてみる必要のある意見である。

高校生活にも馴れた、大学入試にはまだ間がある、少しのんびりなどと考えたなら取返しのかねことになつてしまふ。裏返して言えば、高校生活が如何に充実したものであつたかという事は、二年生の生活が如何に充実したものであつたかで決まると言つても良い程である。

農業用語に「最少律」という語がある。また「最少養分律」という語がある。作物の生育量（収穫量）は、その生育に必要な養分・水・空気・温度・光などの諸因子のうちで、供給量の最も少ない因子に支配される。これを最少律と言う。養分以外の因子が充分に保証されているときは、養分中の最も不足する成分によって支配される。これが最少養分律である。

高校生の、特に二年生にとって、生育に必要な因子とは、成分とは何々であるか。数多くの教科科目の学習、読書、思索、クラブ活動、その他、等々二年生であればその他学年生より有利な部分があるはずである。農作物の収穫量と同様、人間としての人格・能力等の実のりも種々の因子・成分の総合されたものであり、そうだとすれば、人間の場合にも「最少律」「最少養分律」という陥し穽があることを知らねばならない。各教科科目の偏らぬ充分な学習、だがそれだけではだめ、それが二年生の充実した生活と言えよう。

新入生への期待

一年学年主任 小 樽 幾 夫

四月六日、陽春の花の下、双眸を輝かせた少年達とはれがましい装いの父母の群に校庭ははなやいだ。午後一時より催かれた入学式で三百四十八名の少年が入学を許可されて、洪川高等学校の生徒として第一歩を踏みだした。約一月前に実施された入学試験を突破してきた生徒であるから、新入生、父兄の胸中は嬉しきでいっぱいであつたろうが、われわれ迎える教員側ではある感慨を持たざるを得なかつた。毎年の例でいえば、入学の祝辞の中に、「諸君は激烈な

入試を突破してみごと栄冠を勝ち得て……」という言葉があるはずであつた。ところが今年は募集定員三百六十名に対して実際の受験人員は定員を大分下廻った。本校創立以来六十年の間未曾有の珍事？ではないかと話題になつて、入学試験の得点に深い関心がかもたれた。

試験の結果は例年の洪高受験生と質的にはあまり変化がないと思われたが、ホンの僅かやはり例年とは違つていた。このような事態は本年だけのものか、それとも今後続くものかは別の機会に検討されるべきものとしても、われわれ一年担任の教員としてどのように対処すべきか態度を決める必要があつた。

質実剛健をモットーとする洪川高等学校の伝統を受けつぎ、統一テストによつてますます激化する進学希望を達成させるために、このような生徒をどのように教育していったらよいか、一抹の不安がないこともなかつた。

しかし現在の洪高の教育状態を考えて見る時、内外からレベルアップを期待されている時に當つて断じて教育レベルを下げるべきではないという大方の意見の一致を見た。この事は機会あるごとに生徒に対して訴えられたので、今年の一年生は高校生活の酷しさを相当強く受けとめていることと思う。

入学以来約一ヶ月過ぎて、一年生もようやく学校に慣れて勉学に運動にのびのびと活動しはじめた。若い肉体と精神は常に躍動し前進を止めてはならない。彼らはわれわれ教職員の願いを十分自分自身のものとして、りっぱに洪高の伝統を引きついでくれることを期待する。

創立六十周年を迎へ

定時制教育の変遷と本校の現状

男女共学制が施かれて

定時制教頭 登坂 忠夫（旧十八回）

高等学校の定時制制度は、教育の機会均等の根本理念に基づいて、昭和二十三年の学制改革とともに発足しました。本校定時制も同年十月一日一学級定員五十名で開校し、以来三十二年を迎えました。この間、定時制教育振法など関係法令も制定され、定時制教育は、多くの困難や支障をのりこえながらも年々整備充実し、学校教育の重要な一環として、働きながら学ぶ多くの青年に大きく寄与し、地域社会の発展に貢献してきましたことは周知のことです。



（定時制入学式）

しかしながら、勤労青少年のための高等学校教育として重要な役割を果たしてきた定時制は、全日制課程への大幅な進学率の上昇や社会情勢の変化にもなつて、定時制入学者の減少や入学者の多様化など著しい傾向が全国的に表われてきました。

本県でも、かつて一万名をこえた定時制生徒は、現

在では二千六百名そこその状態であり、しかもこの様相は、今後ますます厳しくなつてゆくのではないかと考えられます。ここ数年、生徒数の急激な減少により、その地域の教育的使命を果たして、募集を停止する学校が目立っていることも事実であります。定時制教育は、曲り角をとうに過ぎ、退潮のごとく、衰退の一途をたどるのではなからうかという声も聞きますが、担当関係者にとって憂慮するところでもあります。

全日制志向の高まる中で、定時制入学者は今後も減少することが予想されますが、将来、門を広く一般社会へ開き、生涯教育との関連において定時制教育のあり方が新しく検討されるべき時期に来ております。この意味では、定時制高校の存在意義が高まってくるのではないかと思います。現在生徒数の大幅な変動ないし入学してくる生徒の多様化などから、教育制度・内容の改善を図ることが緊急の課題となっております。国や関係諸団体においても今後の定時制教育のあり方について、試策がなされ、将来大きく変わつてゆくのではないかと考えられます。

さて、本校の現状はどうであらうか。経済界がようやく高度成長期に入る三十八・九年を境にして、生徒数の減少が目立つようになり、四十三年一学級減、一学年一学級のいわゆる小規模として現在にいたつております。生徒総数七十五名（最低時五十六名）ここの二年漸増の傾向にあります。一般に、小規模校では、教師と生徒の親密感を深め、家庭的雰囲気の中で、教科に限らず全人格的にゆきとどいた指導ができるなど、望ましい教育を期待できる反面、職員配置の問題や生徒の希望と必要に応じた多様な教育課程の編成が困難となります。また活気が失われ、良い意味での刺激に乏しくな

り、ともすると向上性に欠ける面も生じます。この長所を伸ばし、短所を補い魅力ある学校づくりに、専任職員一致して励んでおります。

今回、県教委の方針で五十四年度入学者から女子生徒の就学を認め、男女共学で生徒を募集することになりました。当初、生徒募集にあたって、入学者の減少という厳しい状況が続く中で、果たして女子が何人志望してくるだろうか危惧されたが、十名の入学者がおります。現状、二十五名の新入生が楽しく学んでおります。女子生徒を迎えるについて、専用の施設・設備でありませんが、県当局のご配慮により、新たに更衣室・トイレ・保健室が完備され、家庭科実習室も五十五年度をめどに完成の予定になっております。また、学校長のご努力により職員二名の定数増あり、学校運営に一層の充実さを加えてまいりました。時あたかも、本校創立六十周年を迎え、期を一つにして男女共学制が施かれたことは、機縁とはいえ誠に嬉ばし現象であります。母校の限らない発展を願うとともに、定時制教育の充実を目指して邁進したい所存であります。

我ら在校生はがんばる

インターハイ・国体をふりかえって

二年 遠 藤 庄 宏（スケート部）

三学期も始まり、インターハイまであと十日とせまり、そのころはもう勉強どころの話ではなかったと思う。自分の調子が今一歩だったのかかなりの不安感があった。そんな中、渋高スケート部はレ

ースの二日前に軽井沢入りしレースの日を待った。しかしこの間、ずっとランプをして騒いでいた。最初は緊張を取り除くためとやっていたが、その情性がレースが始つてもとまらなかった。暇さえあればランプをしていた。結果は見ての通り悲惨なものだった。そんな事だから国体もほとんどあきらめていた。全国の壁の厚さとインターハイの精神的ショックでいじけていた。後に聞いた話だが、コーチの間で自分があまり元気がないので補欠と交代しようか、という意見も出ていたそうだ。

インターハイと国体で最もちがっていたのは生活態度だったと思う。国体の時は、起床、食事、睡眠などの時間が各レースの時間に合わせられ、もちろんランプなどをする余裕などはまったくなかった。そのせいか、インターハイの時より体がよく動くようになり、予選、準決を通過、決勝では三位に入賞と、あまりにも幸運すぎるほどうまく事が運んだ。自分自身、喜びと驚きでもうめちやくちな気持ちだった。国体はかなりラッキーなところもあったが、入賞の原因の一つは、やはり現地での生活態度の徹底だったと思う。

今回の二つの全国大会で現地での生活態度の重要性をつくづく感じた。来年はインターハイ、国体共に北海道だけれど、あまりはしやがず生活態度をきりつとさせてレースに挑みたい。

入学しての感想

定時制一 A 鈴木 まわみ

初めて私が学校に行ったのは12日でした。私と他の二人はおそくなって入学しました。他の人達とはちがい不安な気持ちでいっぱい

した。でもみんないい人ばかりでした。先輩がみんな男の人ということがなんとなくやでしたけれど、今はもうおもしろい人ばかりで良かったです。部活動でもクラブでも人数が少ないですけど、みんないっしょうけんめいやっているようです。授業中など先生もいっしょうけんめいやってくれます。わからないときは回ってきておしえてくれます。仕事をして夜学校にきている人がだい部分なのですが、みんな4時間という短い時間一人一人真剣に聞いているようです。数学の時間などとなりどうしておしえ合ったり先生におしえてもらったりして、その一時間をすごしています。

まだあまりなれないのですが、男子の人も女子の人もみんなさいきんは中学のときと同じようにきがるに話をするようになりました。定時制は四年間という長いのですが、がんばって行きたいと思っています。そして四年間楽しかった四年間にして行きたいと思っています。

在職のころ

長尾輝景

本校が創立六十周年を迎え、その発展の模様を見極め、更に将来の伸展を希うものである。関係十四ヶ町村の要望によってである。大正九年渋川小学校の一角に呱呱の声を上げて六十年の歴史を回顧してみますと、小学校の西隣八千坪を地ならしし、利根川原から職員生徒が石を運んだことがある。松の木を有志寄付者の家から大八車で運んだ。梅の木、桜の木、杉の木、又竹まで植樹した。芝を校庭に植えて手入した。石を拾い運動場の整備をした。校舎、控室、理化室、は今は姿がないが講堂は今日の半分位であった。校長公舎

が建ち寄宿舎が建ったが今はその姿はない。移り変わる世に処して本校関係者の努力が身ににじみ出るものがある。その間一万人に近い卒業生を世に送り、多数の人材を輩出した。それを育くまれた各先生方の辛勞をしのびその業績を継いで今後に期したい。新制度高校教育の課程を通し、人間形成の場として改築、鉄筋四層樓の巍然たる新校舎の実現を見ました。定時制は今年より男女共学となった。内容外観の整備。学園として一段立派になった。ゆるぎなき心の拠り所となった。在校生は勿論卒業生も地域の人々も本校の名を心より誇りとし信頼し、真にお愛し下されたくそれが六十周年の真の記念になるのであります。

卒業生だより

若い世代にのぞむこと

同窓会顧問 堀口吉七(旧二回)

- 一、親に孝行しなさい。
 - 二、ちつとやそつとの事でへこたれない身体と、筋金の入った根情を作りあげなさい。
 - 三、自分の仕事に没頭し、精いっぱい働きなさい。
 - 四、無駄を省いて貯金しなさい。
 - 五、御国の為め、郷土の為めには分に応じた散財をしなさい。
- 毎日、朝夕、御先祖の靈に感謝し、右の事を誓い、今日一日をしっかりと務めなさい。明日も務めなさい。明後日も又務めなさい。半月、

一月、半年、一年、三年、五年、十年、二十年、三十年、四十年、五十年、六十年、死ぬまで務めて続けなさい。この行事、一隅を照らす、立派な人生の一生です。

衣・食・住―戦争のころ―

元PTA副会長 宮 前 剛 (旧二十回)

戦争末期から終戦後の変化激しい頃(昭和19年より25年迄)東京に住んで居たので衣・食・住を考えるが、思い出も深い上に当時の様子がよく判ると思う。

衣…学生服も小倉の詰め襟で膝の所に二宮金次郎の如く大きな継ぎが当って居り、ゲートルを巻いても隠れないので一寸恥しい思いをした記憶がある。終戦後洋服布地配給の抽選が当り、生れて始めて背広を作り、長野県の友人の結婚式に招かれ、酔って囲炉裏でズボンの裾を焦し、悔んだ思いも今は懐かしい。

食…三食付四〇円の下宿で大豆の方が多様な井に軽く一杯の飯にうすいトマトの味噌汁やにしんやアンモニヤ臭い鮫でも未だ米粒がある中はよかったが、下宿でも、とても食事が出せなくなり、外食となったが、芋殻だけの日とか干した杏ばかり食べさせられた日が一週間も続いた頃が最低だったのだろう。群馬県は米産地ではないので家から米を持って行く余裕はなかったが、東北の友人が運んだ銀シャリの炊き立てに味噌をおかずに、ご馳走になった味は忘れられないし、その友には今でも頭があらがない。その外食もインフレで郷里に帰る頃は一食二〇円位になって了った。

住…四畳半に二人で住んで居たが帰郷する前には一人で住める様

になって来た。空襲が盛んになる前は親戚の家に暫時置いて貰ったが疎開する事になったので専門の下宿屋に移ったが、B29の空爆が激しくなるにつれて地方へ疎開する人が増えて行き「売家」の札が下って居る家がボツボツ目立つ様になった。先見の明があれば親に話して土地や家を買って置いて貰えば今頃は…と残念な気もするが、当時は生きる為に精一杯であり、そこ迄考えつく人は何かのドンになって居るに違いない。

後輩のために

農林水産省物価対策室長 入 沢 肇 (全十一回)

あと二十年ちよつとで二十一世紀である。現在、高校に在学中の諸君は、その時三十代半ばで、人生で言えば一番油がのりつつある年代になっている筈である。そして二十一世紀の前半は、君達とともにある。否、君達の創意と工夫のもとに新しい世紀の歴史が創られてゆくのだ。その二十一世紀は、現在私達が生活を営んでいる二十世紀よりも、人口構成の問題、資源の問題、エネルギーの問題等で一段と難しい社会となることが予想される。二十一世紀は、「ローム・クラブ」の「成長の限界」のレポートに書いてあるように、資源等の幾何級数的な消滅に伴う絶望的な地球像というのは、そのまゝ、あたらないとしても、我が国のように資源、エネルギー小国にとっては、繁栄を持続し、豊かな生活を維持することは、かなり困難となるに違いない。今、我が国はある意味で歴史上稀にみる自由を享受しているが、(勿論、絶対的な意味でいっているのではない。)このような社会経済の柔構造も硬直化の方向で軌道修正されること

も予想される。一億三千万人の人口を擁し、その生活を安定的に支えるのには、「管理社会的」な枠組みも要求されるようになるかも知れない。このような時代を展望するとき、その時代の中核を支える君達の役割は、益々重要となる。どうか、それにふさわしい人間になるように広い世界を巾広く見て、豊かなバランス感覚を身につけるようになって欲しい。それには、今のうちから、良く体を鍛え、基礎的なことを良く学び、良き友人関係を持つことだと思ふ。

学生生活について

医学部四年 荒井賢一（全一八回）

大学生になってから、はや四年目に入っています。本来ならば、来年は卒業ということだが医学生ゆえに、「半ばすぎた」という気持ちで今だにのらりくらりの生活をしています。これが年をとるということがどうかわからないが、大学生になってから実に一年が短く感じられております。これは一日一日に充実感がないからだろうか、単位取得に追われているからだろうか。このままではいけないと思ひながらまた一年が経てしまふ。適当に勉強し、適当に運動し、適当にアルバイトをし、他人からみれば独身貴族ならぬ学生貴族と思われているのに違ひない。また一面、「最近の学生は勉強しなくなつた」ともよく言われている。そして私はこうした日々を改善しようと思ひつつ、しかし甘んじているのが現状です。時には、自分に嫌気がさし、またこれでいいと肯定し、つまり夢、希望というものが色褪せてきたのかと思います。俗にいう「しらけ」ということでしょうか。かつて抱いていた夢というものが現実という影にかくさ

れつつその現実が、かつての夢であつたかのような錯覚に陥いつて、現実というものを肯定しているのだと思います。

ところで、私のこれまでの二十余年の間、現在に於る自分というものを今までに見つめてきたことがあつたかどうかと思ひます。しかも社会にある程度目を向けた段階で、そして今、新たに、学生生活を考え直してみた時、一日を忙しく過してゐる社会人と異なつたまま、勉強に追われる高校生と違つた生活、「自分というものを本當に見つめながら生きる、時に考え、時に悩み、時に苦しんだ自分から逃避しないで生きる」という生活でありたいと気づいた今日このごろです。

❖ クラス会報告 ❖

旧制渋中第一回

大竹 国 一

大正九年四月、新設の渋川中学校に入学した我々のクラスメイトは五十三名、大正十四年三月卒業した仲間は一十三名、その後現在まで五十四年、生存者は二十二名という物さびしい状態となつた。戦後数年クラス会開催の強い要望で第一回が伊香保で持たれたのが昭和二十六年、その後毎年かかさず開かれてゐる。時にはぎやかにやりたいとの希望で一回から三回の卒業生合同、或は一回から五回までの合同で開いた年もあつたが結局我々一回だけの会が一番しんみり出来る様な気がして最近是我々一回だけの会合になつてゐる。今年は生存者二十二名のうち参会した者十二名という僅かな数に減

ってしまったがいずれも年々欠かさぬ定連ばかりである。

すでに七十才をこえて中には七十四才になる者もいる。欠席者十名の健康すぐれずというのは僅か二名か三名で、まだ一線で活躍して出席出来ない者もいる。近年は歌もつたわずよく飲みよく語り合う会で終止しているが、昨年あたりから酒量が幾分減った様に思われる。

恩師斉藤勘二先生、長尾輝景先生はいつもお元気なお顔を見せ、我々を元気づけて頂いていたが今年はお体を気づかわれてお出で頂けずや、物さびしい会だった。毎年サイン帖にサインをする事になっているが、数年前に比べると筆勢にや、衰ろえが見える様な気がする。

恩師平野先生は太田市にお出でになられるが、遠出なされないのが残念である。高血圧を病んだ永井君が東京から毎年不自由な体で出席されるのは嬉しい事である。来年は今年より一人でも多く出席される様にと世話係の私は考える。そして現在の二十二名がいつまでも欠けない様に希って止まない。

旧制渋中第三回クラス会について

元同窓会長・顧問 飯野藤好

私等第三回のクラスは卒業時は七十六名であったが、その後物故した者二十八名、音信不通の者八名で、現在私の掌握して居る人員は四十名であります。毎年一回春に親睦を兼ね一泊でクラス会を開催して居ります。

一昨年即ち昭和五十二年卒業五十周年に当たりましたので二、三の

発起人の方と相談し出来るだけ大勢の参加が出来る様に、宿は同級生の福田君の伊香保温泉ホテル紅葉館にお願いし、恩師の長尾先生始め斎藤先生、平野先生、学校長、同窓会本部を御招待申し上げ開催致しました処、別紙記念写真の通り長尾先生始め、本部先生方、同級生、計三十一名の参加を得まして和気あいあいの内に盛大に出来ました事は今までにない楽しい会合でありました。

五十二年前渋中で共に学び、共に遊んだ少年も今年古稀を迎え、頭は白くなり、しわはふえ、いつしか孫の数を自慢する年頃に成った。然し事クラス会となると、皆童心に返り、はしゃぎ廻り、思い出話に花をさかし、夜の更けるのも忘れてしまいます。蓋しクラス会のだいご味であります。昭和

和二年校門を出て友は離散し、世は移り変わっても故郷の山河はそのまゝの姿であります。私等の友情も変りなく自然の如くありたいものです。本クラス会は会員の減る事はあつても増えることの無い会であります。

過去半世紀我々は世界の大事件に遭遇し有史以来の辛苦を経験したなかまです。これからの余生を有意義におくるためにも諸君が年一



(旧3回クラス会)

回のクラス会には一人でも多く参加し、みのりある会として永続したいものであります。

最後に物故された朋友の御冥福を心からお祈りして、クラス会の思い出と致します。

コントラ会（旧制十八回）

金井 吉雄

夢を抱いて母校を巣立って早や二十七年、昭和十七年の卒業である。

良暹法師の詠う「何処も同じ秋の夕暮れ」の如く級友を偲ぶ憶いが歳々濃く成るのは誰も同じなのか。昆虫会（恩師は昆棒とトウさん）



（旧18回コントラ会江之島）

は高野先生夫妻を囲み隔年に開かれる。神保、高井、荻原を核に樺沢、須田貫、宮下、田部井、飯塚、小此木、茂木、柴崎、石北等と協議し決る。神保、横内設営の伊香保では松本垣や五十嵐、広島から古稻も翔んで来た。彼は今春島根発の長に赴任し島方と飲んだそう。木暮剛、根岸、相川、狩野、松岡、等在京諸兄設営の江の島では同伴との事で奥方連も多く、宮崎、

高野の懐しい顔も見え根岸夫妻等の案内で長谷、鎌倉にて解散。草津では楽団入りの豪華版で奥方連も大喜び、翌日は茂木提供のバスで白根、浅間を廻り解散。今夏は伊豆伊東で行う予定。この恒例級会の他東京勢と合流し五十嵐設営の浦和で鰻を喰う会には鹿沼、角田岳等二十名が集った。毎年在県級友が集い花見、鮎築、忘年会を行い、高崎当番の時は樺沢、須田貫等の狩り出しで初顔の馬場、須田、下田、小淵伊、山口甲、松下昇、善養寺の他に常連の福田、小淵益、安部正、両一倉、斉藤、登坂や土岐、松下敦、山口政、里見木暮卓等五十名が佐復設営の赤城荘へ集った。花見は樺沢、須田、山宮、高平等前橋当番で横内、五十嵐等廿名、鮎築は家族同伴で落合や坂東で行い滝野、東野、見城、浦和から五十嵐も来て奥方連も夏宵の涼を堪能した。その他家族毎随時集り旧交を暖めている。人生の半を省み諸兄の自愛、御健斗を祈念し擲筆するに臨み悲しい報告だが江の島級会では元氣だった吉田文男君が急逝された。謹んで御冥福を祈る。

全日制第八回クラス会

松村 紀 沓（旧高木）

私達第八回卒業生の活動状況を御報告させていただきます。私達同期生が最初に会合を持ったのは昭和三十九年の春、利根川の辺りにある大正橋センターで卒業後初めての同年会でした。この時は私達も社会人としては、まだまだ一人前とは云えない時期で、大変自由なからででしたから、参加人数も大変に多く百名をこえていたかと思ひます。卒業後八年ぶりの再会とあって楽しい一日を過しまし

た。

年月がたつのは早く、それから十年が過ぎて五十年の一月の五日に伊香保天坊で再会致しました。連絡をとるのに住所の変った方が多く、幹事さんに御苦勞していただきました。準備会は半年ぐらい前に市内近隣に住む方に集つていただき同年会の開催について御相談申しあげたところ、再会の期待に話が進み、スムーズに計画が出来ました。正月の五日と云う日は他県から集つていただく人の事を思つて決定したのですが、仕事始めなどの都合であろうか、参加人数は六十名ぐらいでした。この時は登坂・小川・唐沢・池田の各先生に参加いただき、会場も一段と活気がありました。

第八回卒業生東京会が五十一年の十二月二十六日東京銀座で行われ、東京近辺の方が集つて近況をたしかめあつてくださいました。その会に渋川からも招待いただき九人が渋川から参加させていただきました。神奈川県の県議に同年生の永井君がなれた事もあり、東京勢の皆さんは大変活気がありました。

再会を約束してありましたので五十三年の暮に伊藤経営のうどん藤左衛門で同年会の準備の為に渋川在住の皆さんに集つていただき、二月二十六日水上温泉ひがきホテルで会を行う事に決定しました。幹事の皆さんに御苦勞いただき住所もかなり正確なものとなり、迷子葉書も二十通たらずとなり、私達もぼつぼつ落ち着く年になったかと思ひました。当日は恩師の登坂・藤井両先生が御出席下さり、久し振りの再会に皆さん大変感激致しました。出席者は五十五名でしたが、盛大な会となりました。さすが酒の量は少なくなつてしまひ、まさに中年の感でした。思ひ出話又現況と夜のふけるまで語りあい翌朝は五十五名全員そろつて朝食をとり、次の会を約束し、た

のしくわされました。

◆同窓会支部報告◆

◎県 庁 支 部

支部長 中 沢 俊 祐 (旧十四回)

県庁裏の利根川が雪解水で濁り初める四月は、県職員的人事異動が行なはれ、新規採用者を迎え入れる時期であつて、県庁支部の活動も活力を増すときである。

県庁支部の会員数は百五十名を超える盛況であつて、その活躍ぶりは福田企業管理者、藤井衛生部長をはじめ、各部課の主要ポストに亘つて多士済々である。これ等先輩の活動ぶりが、後輩に刺戟となり、後輩を引き立て、愈々人の和を固め支部活動を活発にする基盤となっている。

顧りみて、十数年前有志によつて発足した当支部が、このような成長発展を遂げることが出来たのは、会員の不撓の努力に因ることは言うまでもないが、その間前橋市内在住の諸先輩或いは県会議員諸公更には同窓会本部から御支援御鞭撻によるところ多大なものがあつたことを、深く感謝するものである。

支部の会合は、春秋二回開くことを例としているが、昨五十三年春の会合は、真下県会議員の議長就任、木暮武太夫氏の日本観光協会理事就任の祝賀を兼ねて、前橋市内で行つたところ、特に若い会員の出席率が良く、支部始つて以来の大盛会であつた。

会のメは、旧制卒業生による「燃の山のしづまりて」に続いて、

新制卒業生の「自由の子民主の民ぞ」の校歌斉唱に終ることになっているが、校歌を歌うことによって十代の青春をとりもどし、明日への活動の元気を恢復するよすがとなっていることは疑いない。

◎赤城南支部

顧問 嶋村正彦(旧七回)

創立六十年ともなりますと、卒業生も多く、中高の年令差等、仲々まともにくいものです。五十周年は記念行事に協力出来ました。ところでその後の状況ですが、役員会程度で仲々全員総会が開けない様な有様です。長いこと支部長としてお世話になりましたが、一昨年私は顧問になって、溝呂木の内山藤一支部長を中心に新役員組織が出来まして、若い役員でやっていたくことになっています。支部長 内山藤一、副支部長 都丸和栄、津久井曠 角田勝巳 永井孝雄、会計 荒井信一 各氏 七名

大字役員 持柏木 藤川忠太郎、狩野衛 藤川勝美、溝呂木 南雲武雄、栄 下田国男、北上野 岡田克男、勝保沢 羽仁素堂 萩原重樹、見滝 望月多賀夫 角田寛 永井昭二、上三原田 狩野隆高橋隆夫 長岡英男、三原田 荒井茂 永井敏寿 荒井利継、樽石田喜男 角田卯伝治 須田享雄 嶋村昭彦、宮田 津久井次夫 角田真三郎 田子賢二、三原田団地 長岡洋一 以上各氏二十五名

去る五二年十一月十九日 新役員を決定し、新年総会の計画、母校永年会費、体育後援会等協議を進めている処であります。

卒業生が村に定住していないので、村に住んでいる方々だけで細々と行事を進めている次第です。新制高校卒業の方々も五十才に近

い年令層になっていますので、若い方々の奮起をご期待申し上げたいと思います。

私も永年同窓会に出席しました。仲々本部同様支部も出席が悪いので困っています。よい方法がありましたら、お教え下さい。

◎赤城北支部

書記 高橋隆(全二回)

赤城北支部は、支部全体としての活動は、不定期ではあるが懇親会を持ち同窓生の親睦をはかっている。同窓生が故人となった場合は、支部より花輪を送り役員は、告別式に参加し弔慰を表わしている。

個人個人の活躍はめざましく、村の役職につき個々の能力、技能を発揮している。

須田実二氏は、老人会の会長を務め老人の奉仕活動やレクリエーション活動の指導に張切っている。狩野半平氏は、文化財調査委員と写真愛好者の写真技術指導をしている。八木文雄は、青少年の不良化防止にあたり、少年保護監察委員の要職についている。支部長 須田武雄氏は、体育協会会長、文化財調査委員の要職につき、赤城村のスポーツ振興と民族芸能及び重要文化財の保存と紹介に貢献し、テレビ放送や新聞報道に数多に寄稿し、多忙な日々を送っている。

茂木秀夫氏の日本画作品は、日展に入選し今後画家として活躍が期待される。狩野晃男氏は、村議会議員に二期当選し現在地方自治に貢献している。

角田昇氏(三十七才)が、五十四年四月の県議会議員に初当選し、

若手のホープとして今後の活躍が期待される。

支部役員

支部長	須田 武雄
副支部長	狩野 徳時 角田所平治
書記	角田 昇 高橋 隆
会計	池田 等
顧問	須田 実二 狩野 半平 八木 文雄

◎榛 東 支部

支部長 田 中 恒 市 (旧一五回)

我が榛東支部は昭和四十六年創立以来十年を経過し、会員八〇名を以て親睦を図りつ、母校の発展の為に努力しているものであります。規約に定める会員の慶弔に関し、慶には祝電を送り、これを祝福し、弔には弔電、花輪を贈り弔意を表しているのです。母校も創立以来六十年を経て、在村の会員は産業経済に、教育に、体育に、はたまた文化の向上の各分野に指導的立場で地域社会の発展に尽している事は我が支部としての誇りである。

総会後の懇親会は和氣に溢れ、益々の親睦を高め、自然の内に炎焔の山の鎮りて、自由の子民主の民ぞを歌って毎年意気の高揚を図っているのです。今後一層、洪中、洪高の組合せの役員構成をなし、龍頭蛇尾に終る事なく、長く会を存続して行く心算である。尚毎年洪高を卒業する在村卒業生に送る贐の言葉を記してみる。

贐の言葉

皆さんはこのたび長年の勉強の功成つてこゝに洪高を卒業されま

した。おめでとうございます。大きな望を胸に抱いて広い世界に巣立って行かれる喜びを思い心からお祝い申し上げます。皆さんの中にはたゞちに社会に出て働きになる方もあれば、更に上級の学校に進学される方もあります。いづれにしても皆さんの前途は実に広々として希望に満ちています。どうか自分の力一杯をつくして、それぞれの進む途を切り開いていただきたいと思ひます。

我が榛東村にも昭和四十六年会員約八十名を以て母校同窓会の支部が結成されました。会員相互の親睦をはかりつゝ、母校洪高の発展の為に努力しており、又皆さんの力になりたいと思ひます。

皆さんの御卒業を心から祝福し、最もお目度い門出にあたつて一言贐の言葉といたします。こゝに贈呈いたします記念品はほんとうに粗品であります。祝意のしるしであります。御受納下さい。

昭和〇〇年〇月〇〇日

洪川高等学校同窓会

榛東支部長 ○ ○ ○ ○

○ ○ ○ ○ 殿

◎高 崎 支部

支部長 市 川 三 郎 (旧四回)

母校の地を離れた者たちが懐旧の情に耽り、同窓の友情を暖めることによつて親睦の実をあげようと支部を結成したのは四十七年のことであつた。有志の者の斡旋によつて第一回の総会、懇親会を催したところ、五十名に近い参会者を見ることができた。そのとき顧問に元母校校長、小林熊光先生、小池愼先生を推戴し、支部長市川

三郎(4) 副支部長狩野雄二(3) 馬場亀二(8) 金井高雄(18)
 會計小淵礼次郎(17) 會計監査住谷成(17) 神保英夫(21) 書記真
 下正夫(19) の役員で発足し、この人容に多少の変更はあったが、
 おおむね現在に及んでいる。

当初は高崎市を八地区にわけ、地区ごとに幹事をおき、会への出
 席の勧奨、会費の徴収に当たったが、労多くして実績をあげえなかつ
 たので、今では会費五〇〇円は総会参加者に挙出してもらうにとど
 めている。会員清水謙旨氏(全3) から印刷器具一式の寄贈をえ、
 これによって副支部長の狩野氏が毎年の総会案内の発送を献身的に
 行ない、専売公社に勤務されておる方々や、金井副支部長の世話で
 格安の会場を選定していただき、これによって多数の参会者を見る
 ことに効果をあげている。

今年は例年の約束によつて二月当初の土曜に総会を聞いたが、や
 むをえぬ事情の欠席者がやゝ多く、四〇台を割ったのは残念であつ
 たが、本部からは島田副会長、水穴校長、係の先生、前橋からは例
 年のように角田元同窓会長の参会をえて錦上花を添えていただいた。
 来年を目ざして新しい会員の動向の把握、出席勧誘と役員の若返
 りの実現が本年の課題となっている。

◎北 橘 支 部

支 部 長 渡 辺 正 吉(旧七回)

支部総会は開店休業になりがちで当支部も懇親会を主体とし創立
 以来四回実施されました。その間渋高同窓会便りの配布、五十周年
 記念事業募金、渋高五十年誌の配布等があり、これらの事業をする

ため部落支部が結成されてるようなものでした。昨五十三年二月支
 部役員総会を開き、これが準備をなし、昭和五十三年四月二十二日
 鬼ヶ島ランドにおいて会員四十一名の参加を得て総会を開催するこ
 とができました。総会の議題としては北橘村渋川高等学校同窓会名
 簿の作成を終り、これを総会で会員に配布致しました。昭和五十三
 年三月卒業生まで会員数は二八三名となった次第です。又北橘支部
 の会則を制定いたしました。その内容は役員数は支部長一、副支部
 長二、会計一、書記一、幹事(大字単位)若干名とし、任期二年と
 し定期総会は隔年一回四月開催し、会費は会員負担とし年二〇〇円
 と決定されました。以上述べました通り、会則の承認を得られ、役
 員の選任も終了し、引続いて懇親会が行なわれ盛会裡に旧交を暖た
 め来る昭和五十五年四月再会を誓つて解散いたしました次第です。

支 部 長 渡 辺 正 吉

副支部長 永井 良三 都丸 六郎

会 計 生 方 宏

書 記 塩 谷 勝 己

幹 事 須 田 竹 美

島 村 忠 夫	都 丸 雄 三	塩 谷 博
高 橋 豊	萩 原 俊 一	三 田 正
戸 部 経 三	藤 川 正 義	森 田 健 治
木 村 征 美	萩 原 幸 男	木 暮 攻 元
	樋 口 和 夫	

▼卒業生だより▲

懐古断片

徳島県池田保健所長 福田 綱弘（旧十回）

中学校の通用門を入ると垣根と寄宿舎、左側に一段低くテニスコート。それに続いて校舎が見える。色あせたクリーム色の五年生の教室と講堂そして寄宿舎を結びつける渡り廊下がテニスコート二面を抱え込む様にのびていた。昼休みのベルが鳴ると我先にとアルミの弁当箱をなげ出し裸足のまゝ、校庭へ。火山灰土の軽石が足の裏を心持よく刺激する。

校庭の芝生に寝転んで雑談に花を咲かすのも初夏から初秋までだ。

「何、嘘だんべ、そんな事。」

「嘘じゃねえヨ、本当だい。」

何か議論に熱が入り、それに巷間噂になって居る御用聞きの実見談まで入って賑やかな事、要約すると子供を遊ばせて居た堂々たる体軀の夫人がうずくまった折、偶々斜面に寝転んで居て股間をまともに拝見したと云う事。それにゼスチャーまじりの話が入るのだから、熱の入るのも当然。傍で寝転んで聞いて居ない様な顔だった真面目な村山がポツリ、

「風に当って揺れていたのになア、気が付かねえんかなア。」

真に迫ったこの一言で話は俄然真実味を増し話題まさに白熱、可境に入らんとする時、惜しむべし始業のベル。牧歌的風景も先ずはこれ迄。

四年生は東西二組に分離、東隅に隣合った二教室、今しも学期末試験の真最中。日頃の悪童達も至極神妙、寂として声なし。只聞えるは紙と鉛筆の音、時たま見廻りの先生の足音のみ。

突然張り詰めた静寂な空気が破られる事件が起った。級全体の視線が一せいに窓際三列目、最後の席に集中——。其処に体操の川島先生が手に何か握って二、三の動作の後、精悍な顔にある決意を秘めて級全員を見廻した。「カンニングだ。」誰の目にも疑いのない所。学校当局の最高権力者の倅と云えども、如何なる結末を招くか、不埒な予想に胸を踊らせたのは筆者一人だけでは無かったと思う。

当時、試験の不正行為が発見されたら、情容赦なく、「事情」「成績如何に拘らず」即時試験中止、停学、謹慎と云う一種の不文律のパターンがあった。

然しその後の試験にも引続き彼は何喰わぬ顔で出席し試験をうけた。何時も服装、言動の端々迄も五月蠅く厳格な学校当局としては誠に珍しい事、我々青春の血が踊ったのも、無理からぬ事だったと思う。そして教頭の出方に注目した。今考えると学校当局と生徒の板挟みで教頭も頭が痛かったに相違ない。

芝生に昼食もソコ／＼にすませた連中の集る輪が日増しに大きくなって行つた。中央の職員室から校長の双眼鏡に依る偵察が屢々見受けられ、時には担任の池沢先生が大きな集りの輪の中へ仲間入りする事があつた。

目に見えない怪し気なエネルギーが濃縮され始めた。放課後、静寂そのものの真光寺境内の閻魔堂の前にクラス全員が集つて来た。

「登校拒否、明朝決行」とストライキの話が煮つまつた。遂に明朝、八幡宮に学用品を持たず集合と云う事になった。

翌朝、渋川駅に剣道の竹内先生が出迎えて居て、「一応八幡宮に行かず登校せよ。」との御託宣。誰があゝの熱っぽい雰囲気の中から御注進に及んだかの疑問が湧いたが、然しこれで或る程度犠牲が少なく、学校当局の反省と事件の渦中の本人も何らかの形で処分されて終りかと思われた。然し何はともあれ、皆の意見をと、先生をまいて八幡宮の森に集合。

その間、平瀬先生と教頭、新聞記者との論争を垣間見、又軍事教官、多賀捨吉少佐の曰くあり氣な怪しげな情報呈供などがあり、時刻に至り有耶無耶な学校当局の解答に嫌氣が差し空しい一日が過ぎた。そして夕陽の僅かに残る赤城の裾野の広がりを見乍ら帰途についた。

龍頭蛇尾の結果に終り、青春をかけたストライキも期待した処分なく、休学、復学、五十銭の授業料追加された者、又要領よく武術丈の特技で授業料免除の特典を甘受した者と色々あつた。一年後学閥を加味して渋中を去つた先生もあり、矢張り後遺症は多少あつた。昭和一桁の少年期から青年期への五年間、あれから五十年、長い事乍ら昨日の様に思われる一コマを老化の進まぬ間にペンを取つて見た次第。詳細秘話又の機会に。皆様の御健闘を祈つて筆を置きます。

一、昭和五十四年度PTA新役員決まる。

去る五月十九日(土)開催されたPTA総会において、次の方々が新役員に選出されました。

本年度は、十月二十七日(土)に予定されている創立六〇周年記念式典等を控えており、役員方々の御活躍が期待されております。

會長 大塚修平（伊香保町）

副会長 仙田 一夫（渋川・下之町）

宮沢 要（吉岡・大久保）

浅田 勝（中之条・伊勢町）

榎本清茂（子持・吹屋）

藤井江子（渋谷・元町）

監査	安達博司(渋川・金井)
書記	榎正雄(下之町)
海老原洋三(学校)	
登坂忠夫(学校)	
古川功(学校)	
大谷春彦(渋川・中村)	
黒崎正見(学校)	
川崎富三(渋川・南町)	
水穴再喜(学校)	
顧問	
會計	
顧問	
三年部会長	小林方紀(渋川・新町)
副	相崎正一(中村)
二年部会長	石関利雄(吉岡・南下)
副	宮沢要(吉岡・大久保)
岡英弥(渋川・南町)	
浅田勝(中之条・伊勢町)	
一年部会長	山川祐市(渋川・新町)
副	荒木大三郎(渋川・坂下町)
群馬信一郎(渋川・辰巳町)	
定時制	
四年部会長	藤井江子(渋川・元町)
三年	天田幸雄(渋川・元町)
二年	田中正平(伊香保町)
一年	星野繁雄(渋川・下郷)

二、昭和五十四年度PTA予算決まる。

会員総数一、一三〇人(金一、〇六〇人、定七〇人)の構成になる昭和五十四年度の予算が総会で可決されました。

本年度は、創立六〇周年記念式典等が予定されており、健全なるPTA活動を通し、学校教育振興に対して側面から協力するため、効率的・適正な予算の執行を図り、洪高発展に寄与することが望まれています。

概要は次のとおりです。

- (一) 通常会費の部 四、五四七、二八〇円
- (二) 視聴覚教育費の部 八九七、三四〇円
- (三) 特別会費の部 三、四八〇、〇〇〇円

三、創立六〇周年記念事業決まる。

本年度、創立六〇周年に当り、同窓会に協力して式典経費として通常会費より三〇万円を支出することと、特別会費(五二、五三年度積立金約八〇〇万円)のうちから、「放送施設の改修」約三〇〇万円、「校庭整地用ローラー(モーター付)」約一五〇万円、計四五〇万円の事業費の支出が総会において承認され、関係者一同、その完成が期待されているところであります。

なお、校庭は、昭和五十三年度県予算約一、〇〇〇万円で改修され、立派な校庭になりました。

同窓会だより

母校創立六十周年という年を、同窓会も心より祝福したいと思います。

同窓会も六十周年記念事業として

同窓会名簿の改訂

母校々庭に植樹(桜)

同窓会報の発行(PTAとの合同によるこの冊子)

を実施いたしました。

母校々庭のなつかしい桜も枯れが目立つようになりましたので、昨秋に伐採し、植樹を行ないましたが、古木に旧制洪中以来の六十年の重みをみた感じがいたしました。また、新しい桜も今春には花をつけ洪中の新しい門出を思わせるものがありました。

同窓会名簿も、この冊子が届くころには、希望者のお手元に着いていることと思われます。改訂にあたり期別評議員や各位のご協力のもとに、正確な名簿をと心がけてきました。地域別名簿も加え、各位が使用しやすく心がけたつもりです。

購入希望の方は、同窓会事務局までご連絡ください。価格は、送料を含めて三千五百円です。

昨春、一口千円にて同窓会へのご寄附をお願いいたしましたところ、次の方々から計三百口余のご寄附をいただきました。これらは同窓会運営の経費として使用させていただきます。

〔寄附者一覽〕(順不同)

善養寺猪一郎、金井一郎、木暮強、江積久武、萩原春江、木戸昭次郎、石田兵庫、兵藤吉弘、齊藤祐一、福田松太郎、福田尚、木村慎一、藤川多賀雄、小林保次郎、原田進、宮嶺介、渡辺芳弘、新井弘司、安藤行雄、山本賢寿、山田安次、山本富一、石坂孝雄、栗原利夫、谷畑真、小沢完二、梅沢和夫、飯塚亮吉、宮下利一、霞義典、栗田茂、萩原重樹、春山博秋、角田隆利、平沢文夫、関代五郎、中沢広直、宮下貞雄、茂木享、加藤春夫、山本尚、嶋田篤史、平方とみ代(欣哉氏夫人)、大塚幸治、桜沢薫、南雲正和、古屋誠一、古屋賢二、桜井義人、新井祐三郎、新井郁夫、荒木六郎、角田堅次、結城辯之助、池永作、林元市、浅見敬司、志田公雄、黛孝康、狩野勉、羽鳥敏夫、宮崎諭樹、土屋八郎、高橋平八、後藤義典、細谷介石、小池寛、飯塚文雄、岸親幸、狩野弘幸、佐藤直、佐藤和夫、山本輝幸、狩野基房、榎田正義、後閑猛、森田博、中沢弘道、長井芳久、江原多加史、小林三郎、藤田満、平石進、石田重好、田村順一、入沢梅吉、矢代勇、小野沢正司、角田栄寿、柴田実義、伊草敏夫、生方孝佳、福島則雄、浅井正儀、金井健三郎、後藤喜久雄、松浦正美、田中芳雄、植松正秀、田中健二、桑原透、真下和彦、鈴木義久、西沢隆司、中島勉、佐藤威雄、佐藤武久、佐藤俊人、油井貞作、池田真治、荒木忠、岩井義人、町田祐作、地野喜与彦、松岡勇、神保俊二郎、川崎富三、島田卓爾、谷矢庫之助、三原通男、狩野久雄、佐藤義高、駒村潔、樋口和夫、上原正樹、丸山登、高橋豊、宮明宏、高木武夫、狩野敏一、針ヶ谷宥、伊藤久夫、岡谷明吉、戸野三雄、田中誠慈、登坂朝治、齊藤為一、清水健司、宮下桂介、生方美治、清水敦、堀口芳雄、清水忠朗、清水泰志、古稻豊、原沢寿三男、堀

口勇三、荒木功、富金原要、佐藤守、氏名不明者（一名）

以上百五十一名

慶 祝

堀口吉七氏（旧二回）

勲四等瑞宝章

斉藤勸二氏（旧職員）

勲五等瑞宝章

右の方が、昨秋、叙勲されました。同窓会として、心よりお祝いを申し上げます。

群馬県立渋川高等学校

創立六十周年記念事業実行委員会組織

委員長

佐藤 直

（同窓会会長）

副委員長

水穴 再喜

（渋川高校校長）

〃

大塚 修平

（PTA会長）

〃

神保 俊二郎

（同窓会副会長）

〃

川崎 富三

〃

〃

島田 卓爾

〃

〃

中島 由詮

〃

〃

仙田 一夫

（PTA副会長）

〃

宮沢 要

〃

〃

浅田 勝

〃

〃

榎本 清茂

〃

〃

藤井 江子

〃

事務局長

黒崎 正見

（事務長）

事務局員

海老原 洋三（渋川高校教頭）

登坂 忠夫（〃）

北爪 恭平（渋川高校教諭）

小樽 幾夫（〃）

古仙 隆夫（〃）

富沢 孝行（〃）

増田 茂（〃）

山下 隆二（〃）

古川 功（〃）

桜井 直紀（〃）

小泉 清貴（〃）

編 集 後 記

本校は大正九年に県立渋川中学校として設立されてより、本年をもって六十周年を迎えるにいたりました。これも、PTA・同窓会をはじめとする関係各位方のご援助・ご協力の賜と深く感謝申し上げます。

創立六十周年を記念し、記念事業実行委員会を、学校・PTA・同窓会三者により組織し、記念式典をはじめ、各種の準備を進めてまいりました。この冊子も、その一環としてPTA新聞・同窓会報にかわるものとして作成いたしました。冊子作成にあたり、PTA・同窓会関係者のご協力に対しこの紙面を借りてお礼申しあげます。

この六十年間に、幾多の社会状況の変化を受けながらも、渋中・渋高は青少年の育成に「質実剛健」を根底に据え、常に大きな力を発揮してまいりました。

幾多の風雪に耐えた六十年を礎にして、本年が群馬県立渋川高等学校の新しい発展の第一歩となることを期待してやみません。（桜井記）

渋川中学校々歌（旧制）

川窪 千峰 作詞
平岡 均之 作曲

1
炎焰^{ほのほ}の山の鎮^{しずま}りて

明^かけし国原上毛^{かみつげ}の

遠^{とほ}き昔をそのまゝに

澄^みめる深空^{みそら}を翔^かりゆく

黄金^{こがね}のとびを徽章^{しるし}とし

き然と立つや吾母校

3
巖^{いわ}に激し淵となり

百河^{ひんがし}を合し東に

久遠^{くせん}の硫^{りゅう}れ大利根の

時代移^かれ掲^かげたる

不変の理想目指しつゝ

極^{きわまり}知れぬ行手かな

2
一州に野をひろげたる

全^{まつた}き姿や赤城嶺^{あけね}の

高^{たか}きに向^{むか}う衝天^{しょうてん}の

吾等が意気を人知るや

雄飛惣海^{ゆうひらまちかい}内に

輝^けけ毛野^{けぬ}の歴史こそ

4
見よや榛名^{はんなん}の嶺^ねにかゝる

日は燦爛^{さんらん}の紅^{あけ}の色

燃ゆる血潮^{けつしほ}に若人^{わこうど}の

生命^{いのち}も揺^ゆげ渋川の

丘^{かみ}も響^{をたけ}かむ雄叫^{をたけ}に

母校^{はまれ}の栄誉^{えいよ}いや拳^{こぶし}げむ

渋川高等学校々歌

佐藤 春夫 作詞
信時 潔 作曲

自由の子 民主の民ぞ

新らしき文化の国に

我ら生く若き命を

天そゝる大樹にも似て

たくましく土に根を張り

ひたすらに真理をさせり

君見よや渋川高等学校の

健児一千意気高し心素直に

学舎^{まなびや}は榛名^{はんなん}のふもと

居ながらに山うるわしく

門を出て何を見たる

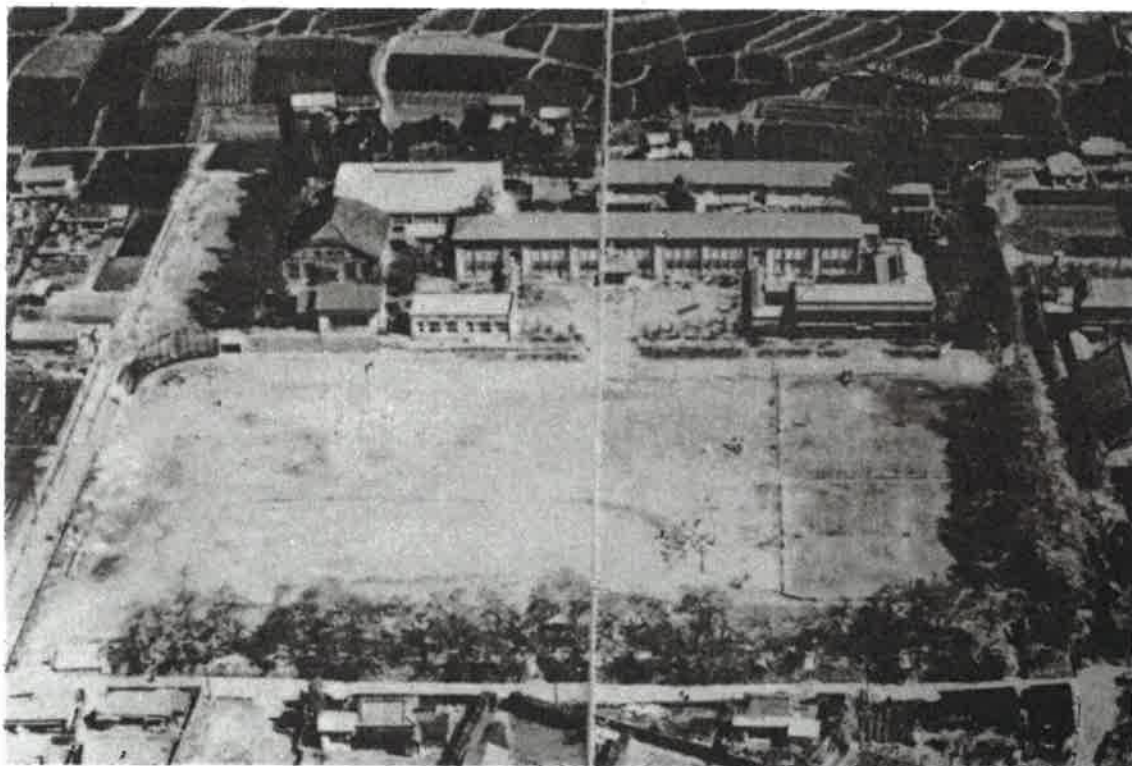
悠々と大利根流る

川波は光たゆたい

おごそかに希望に向う

君見よや渋川高等学校の

健児一千意気高し心素直に



(旧制渋川中学)

昭和54年 5 月25 日 印刷

昭和54年 5 月30 日 発行

編集発行者 群馬県渋川市並木町 678 — 3
群馬県立渋川高等学校
創立六十周年記念事業実行委員会
委員長 佐 藤 直

印刷所 群馬県吾妻郡中之条町 939
山 口 印 刷 所
電話 中之条(027975)3253番